

# 本日よりこと

- ① ベクトル解析
  - 場の解析

# ベクトル解析

## 場の解析

### スカラー場の勾配

スカラー場  $P \mapsto f(P)$  は  $P$  の座標  $(x, y, z)$  を使うと 3 変数関数とみなせるので  $x, y, z$  で偏微分ができる.

$$P(x, y, z) \mapsto \left( \frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right)$$

で決まるベクトル場をスカラー場  $f$  の勾配 (gradient) と呼び

$$\operatorname{grad} f, \operatorname{grad} f(P), \operatorname{grad} f(x, y, z)$$

などの記号で表す.

# ベクトル解析

## 場の解析

### ハミルトン演算子と勾配

形式的記号

$$\nabla = \left( \frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right)$$

をハミルトン (Hamilton) 演算子またはナブラ (nabla) と呼ぶ。  
これらを用いると  $\text{grad} f$  は

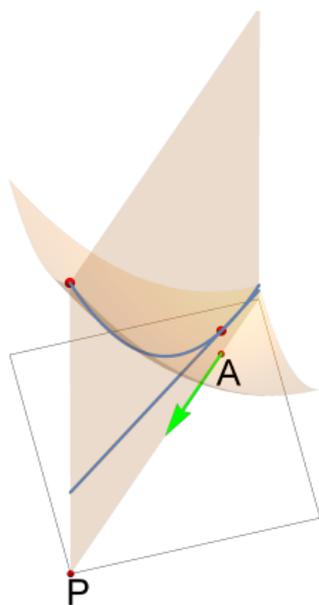
$$\text{grad} f = \left( \frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) f = \nabla f$$

とかける。

## ベクトル解析

## 復習：方向微分

復習：2変数関数の方向微分係数の定義



$z = f(x, y)$  : 2変数関数

$A(a, b)$  :  $xy$  平面の定点.

$\vec{u}$  :  $xy$  平面の大きさ1のベクトル.

動点  $P(x, y)$  を  $A$  から  $\vec{u}$  方向に動かすと

$$\vec{AP} = s\vec{u}, \quad s \text{ は実数のパラメータ}$$

と表される.

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(A)}{s}$$

が存在するとき  $f(x, y)$  の点  $A(a, b)$  における  $\vec{u}$  方向微分係数と呼ぶ. (ただし,  $f(P)$ ,  $f(A)$  はそれぞれ  $f(x, y)$ ,  $f(a, b)$  を意味する.)

# ベクトル解析

## 復習：方向微分

復習：2変数関数の方向微分可能性・方向微分係数の表示

$\vec{u}$  を大きさ 1 のベクトルとする。

(i)  $f(x, y)$  が偏微分可能で、偏導関数が連続ならば点  $A(a, b)$  における  $\vec{u}$  方向微分係数は存在する。

(ii)  $u$  の成分表示を  $u = (u_1, u_2)$  とすると

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(A)}{s} = u_1 f_x(a, b) + u_2 f_y(a, b)$$

である。

このことは 3 変数関数  $f(x, y, z)$ , 空間のスカラー場  $f(P)$  についても成り立つ。

# ベクトル解析

## 場の解析

スカラー場の方向微分

スカラー場  $f$  の  $\vec{u}$  方向微分係数を

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(P_0)}{s}$$

で定める。ただし

$\vec{u} = (u_1, u_2, u_3)$  : 単位ベクトル.

$s$  : 実数のパラメータ

$P_0(x_0, y_0, z_0)$ ,  $P(x, y, z)$  は  $\overrightarrow{P_0P} = s\vec{u}$  をみたす.

# ベクトル解析

## 場の解析

### スカラー場の方向微分と勾配

(i) スカラー場  $f(P)$  が  $(x, y, z)$  の関数とみて) 偏微分可能, かつ各偏導関数が連続であるとき, ベクトル  $\vec{u}$  方向の方向微分は存在して

$$\vec{u} \bullet \text{grad} f(P_0) \cdots (*)$$

に等しい.

(ii)  $\text{grad} f(P_0)$  は,  $\vec{u}$  を  $|\vec{u}| = 1$  を満たしながら変化させたとき,

- ① 向きは  $f$  の  $P_0$  における方向微分係数  $(*)$  が最大になる  $\vec{u}$  の向き
- ② 大きさはその時の方向微分係数の値

であるようなベクトルである。

このことは  $\text{grad} f$  が座標系に依存しないことも示している。

# ベクトル解析

## 場の解析

[確かめ] (i) は 2 変数の場合と同じ。(ii) は

$$\vec{u} \bullet \text{grad}f(P_0) = |\text{grad}f(P_0)| \cos \theta \quad (\theta \text{は } \vec{u} \text{ と } \text{grad}f(P_0) \text{ のなす角})$$

だから (\*) は  $\vec{u}$  と  $\text{grad}f(P_0)$  が同じ向きするとき最大値  $|\text{grad}f(P_0)|$  をとるから明らか.

# ベクトル解析

## 場の解析

保存場とスカラーポテンシャル

$\vec{A}$  : ベクトル場,  $f$  : スカラー場 が

$$\vec{A} = -\text{grad } f$$

をみたすとき,

$\vec{A}$  は保存場である

$f$  は  $\vec{A}$  のスカラーポテンシャルである

という。

# ベクトル解析

## 場の解析

例 クーロン場のポテンシャル

スカラー場

$$f(x, y, z) = \frac{1}{r}, \quad (r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2})$$

はベクトル場

$$\vec{A} = \frac{(x, y, z)}{r^3}$$

のスカラーポテンシャルである。

# ベクトル解析

## 場の解析

[確かめ]

$$\text{grad} f = \left( \left( \frac{1}{r} \right)_x, \left( \frac{1}{r} \right)_y, \left( \frac{1}{r} \right)_z \right)$$

であるが  $r_x = \left( \sqrt{x^2 + y^2 + z^2} \right)_x = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}} = \frac{x}{r}$

$$\left( \frac{1}{r} \right)_x = \left( \frac{1}{r} \right)_r r_x = -\frac{r_x}{r^2} = -\frac{x}{r^3} \quad \text{同様に} \quad \left( \frac{1}{r} \right)_y = -\frac{y}{r^3}, \quad \left( \frac{1}{r} \right)_z = -\frac{z}{r^3},$$

だから

$$-\text{grad} f = \left( \frac{x}{r^3}, \frac{y}{r^3}, \frac{z}{r^3} \right) = \frac{(x, y, z)}{r^3} = \vec{A}$$

## ベクトル解析

## 場の解析

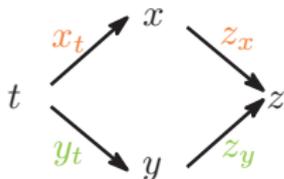
復習：2変数関数の合成関数の微分法 (続き)

(ii)  $z = f(x, y)$  : 偏微分可能かつ偏導関数が連続,

$x = \varphi(t), y = \psi(t)$  : 微分可能

$\implies$  合成関数  $z = f(\varphi(t), \psi(t))$  も微分可能で

$$z_t = x_t z_x + y_t z_y \cdots (**)$$



だから同様に (P の座標を  $(x, y, z)$  として)

ベクトル場  $f(P)$  が  $x, y, z$  で偏微分可能かつ偏導関数が連続,

$x = x(t), y = y(t), z = z(t)$  :  $t$  で微分可能

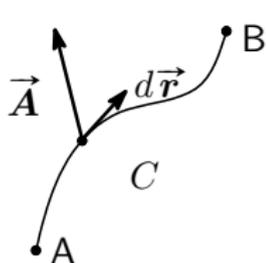
$\implies$  合成関数  $f(x(t), y(t), z(t))$  も微分可能で

$$f(P)_t = x_t f(P)_x + y_t f(P)_y + z_t f(P)_z \cdots (**)$$

## ベクトル解析

## 場の解析

## 保存場の線積分



$$\vec{A} = -\text{grad } f,$$

$C$ : 点 A から点 B に向き付けられた曲線

$$\Rightarrow \int_C \vec{A} \bullet d\vec{r} = f(A) - f(B)$$

(積分は途中経路によらない!!)

[確かめ]  $C: \vec{OP} = \vec{r}(t), a \leq t \leq b$ , 正のパラメータ  $\vec{OA} = \vec{r}(a), \vec{OB} = \vec{r}(b)$

$$\text{左辺} = \int_a^b \vec{A}(\vec{r}(t)) \bullet \frac{d\vec{r}(t)}{dt} dt = - \int_a^b \text{grad } f(\vec{r}(t)) \bullet \frac{d\vec{r}}{dt} dt$$

$$= - \int_a^b (f(\vec{r})_x x'(t) + f(\vec{r})_y y'(t) + f(\vec{r})_z z'(t)) dt$$

$$= - \int_a^b \frac{df(\vec{r}(t))}{dt} dt = - [f(\vec{r}(t))]_a^b = \text{右辺} \quad (F(P) \text{ を } F(\vec{r}) \text{ などと書$$

いた)

# ベクトル解析

## 場の解析

### ベクトル場の発散

ベクトル場  $\vec{A}(P) = (A_1(x, y, z), A_2(x, y, z), A_3(x, y, z))$  に対して

スカラー場  $\frac{\partial A_1}{\partial x}(x, y, z) + \frac{\partial A_2}{\partial y}(x, y, z) + \frac{\partial A_3}{\partial z}(x, y, z)$

を  $\vec{A}$  の発散 (divergence) という。

記号  $\text{div}\vec{A}$ ,  $\nabla \cdot \vec{A}$ , ... であらわす。

# ベクトル解析

## 場の解析

[例：クーロン場の発散]

$$\vec{A}(P) = \frac{(x, y, z)}{r^3} \text{ のとき}$$

$$\operatorname{div} \vec{A}(P) = \begin{cases} 0, & (P \neq 0) \\ \text{定義できない}, & (P = 0) \end{cases}$$

# ベクトル解析

## 場の解析

[ $\text{div}\vec{A}$  の本質：点  $P$  での湧き出し率]

点  $P$  を含み、座標軸に平行な辺をもつような立方体  $E$  をとるとき、

$$\frac{1}{V(E)} \iint_S \vec{A} \cdot \vec{n} dS \longrightarrow \text{div}\vec{A}(P)$$

$\longrightarrow$  は  $E$  を 1 点  $P$  に縮めていったときの極限、

$S$  は  $E$  の表面に外向きに向きを付けたもの、

$\vec{n}$  は外向き単位法線ベクトル、

$V(E)$  は  $E$  の体積。

# ベクトル解析

## 場の解析

### ガウスの発散定理

$G$  を空間の有界閉領域,  $S$  を  $G$  の表面に外向きに向き付けたもの,  $n$  を  $S$  の外向き単位法線ベクトルとし  $A = (x, y, z)$  を連続微分可能なベクトル場とする. このとき

$$\iint_S \vec{A} \cdot \vec{n} dS = \iiint_G \operatorname{div} \vec{A} dx dy dz$$

が成り立つ.